

連載 千座の置き戸（ちくらのおきど）

第二百六十五回 分業と GDP

南出喜久治（令和 7 年 4 月 1 日記す）

GDP（国内総生産）といふのは、一定期間内（通常は 1 年間）に国内で生産された商品（財貨・サービス）の価値額の合計のことであるが、これは、分業が進めば進むほど GDP がふえるといふ性質がある。

たとへば、ある会社の工場で作った商品（製品）を会社の人が直接にそれを買ひ取った会社まで運んで納品して販売するのを、運送会社に頼んで納品してもらふとすれば、運送部門について分業化することになる。そうすると、運送会社のサービスが分業化した分として増えるので GDP が増える。運送、保管といふ分業によつて GDP は増える。GDP は、分業深化のバロメータなのである。

また、老人や障害者などの要介護者がゐる家族があつたとする。これまでは、家族が協力して介護を分担してゐたが、これを人任せにすることとし介護サービスに委託して介護してもらつたとする、介護サービスに委託してサービスを受ければ、その分が GDP を押し上げる。

親孝行は分業に馴染まないものであるが、これを味気ない福祉といふ名の下に無理矢理に分業すれば GDP が増えるのである。

GDP は、親不孝のバロメータなのである。

怠け者は全部自分でするのを嫌がり分業することを好むので、怠け者が増えれば増えるほど GDP は増える。

GDP は怠け者のバロメータなのである。

確かに、分業すればするほど、専門化して効率が高まり、雇用が増えて経済成長する。そのために、分業化を徹底的に進めて GDP を増やす競争をしてきた。しかし、それによつて人々は幸せをつかむことができない。むしろ、忙しなくゆとりがない不安な日々を過ごすことになつてゐる。

GDP は、不安増幅のバロメータなのである。

平成 28 年に、相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」に、元職員の植松聖が押し入って、入所者 19 人を刺殺、入所者・職員計 26 人に重軽傷を負はせた事件があつた。

この事件で殺された知的障害者の被害者は、家族から見捨てられた人で、施設に放り込まれた挙句に殺された二重の意味の被害者である。

家族からは、面倒が見切れないとしてカネを出して家族の一員を施設に入れた。カネさへ出せば、なんでもできる世の中である。そして、捨てた家族が自分の身内が殺されたからと言つて被害者づらをし、損害賠償を請求する。施設の入所費用も管理料も、そして賠償金もすべて GDP に含まれる。

もし、その家族が障害者とともに生活をしてゐたら、こんな被害にも会はずなかつたし、GDP を押し上げることもなかつた。しかし、それが容易ではないのが今の社会の現状である。施設に引き取ってもらはなければ残る家族の生活ができなかつた事情があつたとは思はれるが、いづれにしても施設に放り入れてしまつたのである。

GDP は、家族崩壊のバロメータなのである。

そして、GDP は人が不幸になることのバロメータなのである。

こんな味気ない社会を少しでもよい社会に変へて行くには、分業の深化を止めることである。できる限り自分で行ふこと、分業ではなく、合業（統業）を一步一步づつ目指すことである。

合業（統業）を目指すのは、技術だけでなく、その理念が必要となる。それが祭祀である。

祭祀を行ふためには、祖先祭祀の場合であれば、ご先祖に自ら作つた料理をお供へすることになる。さうすれば、どこかで買つてきた物ではなく、家族で丹精込めて育てた食材で調理したものをお供へしないとご先祖はお喜びにならない。そのためには、自給自足を創意工夫して目指さなければならない。

時間をかけ、手間をかけて真心こめてお供へ物を作ることが必要である。効率とかカネで済ませることを考へてはならない。

そうすると、エネルギーの自給自足、そして、食料の自給自足、その他の物の自給自足をしてお供へ物を作らなければならない、これが自給自足への道につながる。趣味としての自給自足ではなく祭祀のための自給自足である。

祭祀を続けると安心感と満足感が得られる。これは続けた者でなければ解らない。そして、家族単位で自給自足を目指すまほらまとの世界へと歩み出すことができる。

資本主義から脱却し、もちろん共産主義からも遠ざかつて、祭祀による社会が実現できることになる。資本主義とも共産主義ともオサラバをして、GDP は限りなくゼロに近づくことになり、世界は GDP の極小化競争をすることになり、その結果、世界平和が実現するのである。